発　行　所（郵便番号106－0032）
東京都港区六本木６－11－９
スウェーデンセンタービル５階
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel 03（5412）0503
Fax 03（5412）0549
編集責任者　岡　沢　憲　芙
印刷所　関東図書株式会社
定価400円（年間購読料四千円）
1999年４月25日発行
No.309　第31巻　２・３合併号
（毎月１回25日発行）
昭和44年12月23日第３種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

No.309　Bulletin　Vol.31　No.2・3号

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
（The Japanese Institute for Social Studies on Sweden）
Sweden Center Bldg. 5th floor, Roppongi, Minato－ku, Tokyo, Japan

ガムラスタンにある王宮内広場で行われる衛兵交替式

スウェーデン南部ヴェクショー郊外の古城に咲くタンポポ

様々なお店が立ち並びにぎわうストックホルム中心部ドロットニングガータン

写真・文
dill communication

目　次

巻頭写真……1
科学衛星「アストリッド２号」……2
スウェーデンのスヌーゼレン……3
北欧の森を走る……5
森泰人スカンジナビアン・コネクション
・ライブレポート……7
書籍紹介……9
インフォメーション……10
1998年　研究所活動一覧……10
シリーズ　エレン・ケイ(4)……11

科学衛星「アストリッド２号」

Swedish micro-satellite “Astrid-2” launch

スウェーデン王立スペース物理研究所　研究員　山内　正敏

Dr. Masatoshi Yamauchi

スウェーデン最北の町にして世界第２位の面積を誇るキルナ市（人口２万余り、人口密度１人／平方キロ）は、今から丁度百年前（西暦1900年）に鉄鉱山で産声を上げ、一時は世界最大の産出量を誇った鉱山の町である。現在でもヨーロッパ最大の産出量と品質を埃、その生産体制は世界に類を見ない超近代的なものだが、キルナの先進性はそれだけではない。近年は地球超高層研究（オーロラ等）や成層圏研究（オゾン破壊等）の世界的メッカとして、あるいは宇宙開発関係のサービス（無重力実験や人工衛星の管理）の中心地として第二の発展期を迎えている。キルナといえば日本では網走か石垣島に当たる僻地だが、産業・研究の内実は21世紀を担う充実したものだ。

最先端研究・産業の一例に超小型人工衛星（マイクロサテライト）の開発がある。スウェーデンは小国だから、ＮＡＳＡ（米国航空宇宙局）やＩＫＩ（ロシア宇宙局）、ＥＳＡ（欧州宇宙機構）のような大規模な宇宙開発は望めないが、その分、全精力を衛星や観測装置の小型化に費やしてきた。その努力が実って、今や「安い・小さい・早い」超小型人工衛星といえばスウェーデンの代名詞にすらなっているほど世界を大きくリードとている。その開発の拠点がキルナ市の研究所（スウェーデン国立スペース物理研究所：略称ＩＲＦ）である。山椒は小粒でもぴりりと辛い。

ＩＲＦが中心になってスウェーデン初の超小型科学衛星（アストリッド１号）を作ったのが1995年で、約50センチ立方の衛星に観測装置を４つ載せた。それには最新鋭の観測装置も含まれている。但し、どちらかといえば試験衛星としての性格が強かったので、科学的な発見はないが、それでも、１億円以下という値段で科学衛星が上げられる事を証明して、ともかく大成功ではある。

アストリッド１号の成功を受けて、２つの流れが生まれた。一つは、更なる小型化で、その名もマイクロよりも小さい「ナノ」サテライトツという。サイズは約20センチ立方で総重量数kg、その小ささにちなんで「ムーニン」と命名されている。北欧神話の主神オーディンの肩に止まる小さな神の事だ。このムーニン衛星はキルナの研究所のみで開発しており、併設している宇宙工科大学の卒業プロジェクトに組込ながら、なおかつ世界トップレベルの科学衛星を目指す。

もう一つの流れは、超小型宇宙衛星の高性能化である。アメリカの最新衛星に対抗できる性能マイクロサテライトに与えようと言うのだ。その成果がアストリッド２号で、宇宙開発公社がストックホルムの王立工学大学やＩＲＦと協力して作り、昨年12月10日にロシアから無事打ち上げられた。紫外線望遠鏡でオーロラをモニターしながら、その上空の電場、磁場、波動、プラズマを最新鋭の観測装置で測る。世界で一、二を争う高性能の癖

20 EXPRESSEN　FORSDAG 10 DECEMBER 1998

”Rymdmakten” Sverige får sin egen sputnik

Sverige är också en rymdmakt. Fast rätt liten. I dag får vi ändå vår egen sputnik, kallad Astrid-2 (efter Astrid Lindgren).

Det är Sveriges fjärde satellit tillfälles i rymdåldern. En så kallad mikrosatellit. Väger bara 30 kilo.

Men vi har ingen egen raket med kraft nog att skjuta upp Astrid-2 i omloppsbana. Därför åker "hon" snälskjuts med en rysk Kosmos, som i startögonblicket väger 100 ton.

Viktiga experiment

Trots sin litenhet ska Astrid-2 utföra flera viktiga experiment (se grafiken).

Satelliten är byggd av Rymdbolaget i Solna. Den styrs från en markstation i samma stad. Data sänds till marken med 128 kilobit per sekund, fyra gånger snabbare än den vanliga surfaren kommunicerar med på Internet.

Solpaneler ger 90 watt

Instrumenten ombord är konstruerade av Kungliga tekniska högskolan i Stockholm och Institutet för rymdfysik i Uppsala och Kiruna.

Experimenten har fått namnen Emma, Linda, Medusa, Pia. Satellitens solpaneler ger maximeringt 90 watt.

Astrid-2 rör sig i en cirkulär bana i 600 km ut i rymden med nordligaste punkten på 82 graders latitud över norra Ishavet.

Astrid-2 ska mäta:
- Norrsken, elektriska och magnetiska fält.
- Plasmaslitet.
- Elektroner och joner.
- Ta bilder av norrsken.

Börje Lundberg

Astrid-2, ett svenskt rymdprojekt

I skuggan av den påbörjade rymdstationen skjuter Sverige upp en egen satelit.
Astrid-2 är uppkallad efter Astrid Lindgren och går till väders med en rysk raket klockan 12.57 i morgon torsdag.

Avfärden

Astrid-2 skjuts upp med en rysk Kosmos-3M-raket.
Den svenska satelliten hänger med vid uppskjutningen av en annan mycket större satelit.
Det är billigast så.

Fälls ut

Under raketfärden är Astrid-2 hopfälld.

Panelerna med solceller och armen med stjärnsensorn fälls ut när satelliten är i bana.

Uppdraget

Astrid-2 ska utföra experiment kring plasmafysik och "rymdväder", de strömmar av laddade partiklar från solen som kan störa elektriska och elektroniska system på jorden, till exempel teleförbindelser.

Storlek

Astrid-2 är en så kallad mikrosatelit. Den väger bara 30 kilo. Helt utfällid blir måtten 950x45x40 cm.

Grafik: MARIA BLOM Text: BÖRJE LUNDBERG

Sputnik, 1957.

EXPRESS FAKTA

SVERIGES SATELLITER

- 1986 Viking (286 kilo). Studer av el- och magnetfält samt norrsken.
- 1992 Freja (250 kilo). Lånande forskning som Viking, fast fler experiment och mer sofistiserade.
- 1995 Astrid-1 (30 kilo). Forskning kring joner och plasma. Namnen på experimenten togs från Astrid Lindgrens böcker: Pippi, Emil och Mio plus dagboksboken Roria. En model av Astrid-1 finns i "Astrid Lindgrens värld" i Vimmerby.
- 1998 Astrid-2 (30 kilo). "Rymdväder".
- 1999 Odin (250 kilo). Ska studera atmosfär och av ozonsm. En speciell stjärnkamera finns ombord.

に安価というのが売り物で、アメリカや日本なら最低でも500億円はかかる代物を、総費用４億円足らずですませた。衛星は順調に初期テストを終えて、現在はデーター解析が始まっている。

アストリッド２号の実績を踏まえて、次のターゲットも既に模索されている。科学的価値と技術的可能性を勘案した結果、当面の目標として脚光を浴びているのが、「オーロラカルテット」のプロジェクトである。これは同時に４つの衛星を隣接させてコントロールしようという、世界にも先例のないもので、これができれば日本の衛星制御技術をすら抜く事になる。とにかくやる価値は大きいのだ。ただし、４つ同時となると、いくら「超小型」でも予算上の制限がある。そこで、フランスに協力を呼びかけているところだ。2005年の打ち上げを目指す。

かくも精力的な宇宙研究の結果、当然科学的成果も世界をリードしている。たとえばＩＲＦでは惑星科学も盛んで、現に火星大気の研究では、この「田舎」研究所が世界で最も進んでいる程だ。惑星科学が盛んになった理由はもう一つある。伝統的中立政策のおかげで、ロシアの惑星探査機のプロジェクトにも加わることが出来たという事情だ。かような実績を買われて、日本の火星探査機「のぞみ」にもキルナ製の観測装置（質量分析器）が載ることになった。そして「のぞみ」の打ち上げの終わった昨秋には、ＥＳＡの火星プロジェクト「Mars Express」（2003年打ち上げ）にも観測装置を載せることが決まった。もちろん超軽量かつ高性能だからこそ数ある中からキルナ製が選択されたのである。小型衛星の開発の他に、ロシア、日本、欧州の火星探査プロジェクトに加わって、研究者たちは席を暖める暇もない。

執筆者紹介：やまうち　まさとし（1960年生まれ）。キルナに在住。著書「北極圏からの手紙」（鉱脈社）

スウェーデンのスヌーゼレン

作業療法士　河本　佳子
Occupational Therapist, Ms. Yoshiko Komoto

今、スウェーデンでは静かなブームと言っても過言ではないスヌーゼレンブ―ムが身体・知的障害者の間でだけではなく精神病・痴呆症、果ては健康な小中学生徒にまで広がっています。

スヌーゼレンという言葉を始めて聞く人は何だろうと興味がわいたのではないでしょうか。　これからは日本でも度々この言葉を聞く機会が増えて来るかと思いますのでここに紹介致します。

これはスウェーデン語ではありません。

語源はオランダ語で香りを嗅ぐ“スヌーザ”と言う言葉と、うとうととする居眠り状態を指す“ドーセレン”と言う言葉の合成語なのです。

発端は、1980年の後半オランダにあるハーテンバーグ施設で、そこにはダウン症などの知的障害児がたくさんいました。スタッフはどのような教育をしたら一番楽しく子供達の成長発達を促す事が出来るかと常に創意工夫をしていて、その結果、このスヌーゼレンと言う環境設定方法を思いついたのです。

普通の子供は生まれながらにして人間の持つ基本的な能力を身につけていますが、なんらかの障害を持つ子供は自己の感覚を自由に操る術に欠けているわけです。ですから欠けている部分に適度な刺激を与えて補えば感覚器官で受けた刺激が神経系の働きで大脳へと伝達して成長発達の促進に役立つわけです。

ピアノを習う人は毎日の練習から技術を獲得して上手に弾けるようになります。それと同じ方法なのですが、従来の治療や訓練方法では欠けた部分だけを取り上げて集中訓練をしていました。

ところが全ての感覚を含めた環境設定をする事によって、始めて聴覚・視覚・味覚・触覚・知覚を統合したコンパクトな刺激でしかも楽しみながら訓練の一環として身につけて行く事が可能になったわけです。

また、発語のない障害児や重度障害児の周りに

いる人々は、この玩具はおもしろいのだろうか、このクッションは気持ちがよいのだろうかと子供の目の表情やしぐさや音への反応を見る事によってその子供独自の表現方法を学んでいきます。何度も同じ反応を見る事によって子供が首を振るしぐさは嫌悪を現すのではなく、喜んでいるのだと分かって来るのです。　これがコミュニケーションで反応を確かめる環境設定を優先する事で障害児のいろいろな表現方法を汲み取ることができます。

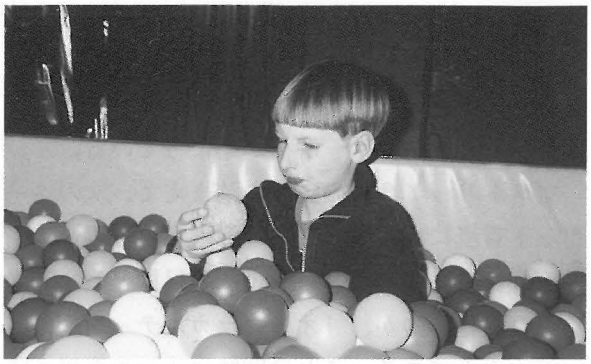
スヌーゼレンと言う部屋へ一歩足を踏み入れると、普段体験出来ないような幻想的な異次元の世界へ迷い込んだような錯覚に陥ります。ロックコンサートやディスコに身を投じたと想像してみて下さい。周囲には様々なライティング効果が施されていて、見るもの手で触るもの全ての形が変化したり音を出したりします。　これほど面白い所はありません。ただコンサートやディスコと異なるのは耳を覆うような楽器演奏ではなく静かで美しい音色の環境音楽が奏でられていることです。

この部屋で一定の時間を過ごしリラックスすれば自然に感覚を自覚できるようになります。　障害児が自ら物に振れ、調べ、音を聞き、誰からの指図も受けないで自分に必要な時間だけ要して学習して行くのです。

本来のスヌーゼレンは幾つもの部屋があり、リラックスを中心にしたホワイトルーム、音楽を中心にしたミュージックルーム、弱視のための暗室、遊戯・活動を主体にしたアクティビティルーム、ジャグジー付きのバスルームなどなどあらゆる角度から五感を刺激します。

オランダやベルギーには数カ所大規模なスヌーゼレンセンターがあり、知的障害者のみではなく、身体障害者もそのセンターでスヌーゼレンを堪能しています。
このアイデアはイギリスにも飛び火して現在大小のスヌーゼレンを合わせて600箇所以上設立されています。

特にこのスヌーゼレンを賞賛し、さらにスヌーゼレンを理論的に究明したのがチェスターフィールドにあるセンターの臨床心理療法士のロジャー・ハッチンソンと作業療法士のジョー・キューインでした。彼等によってスヌーゼレンの確固たる裏づけが発表されたのです。


スヌーゼレンのボールプールで楽しむマルクス・自閉症児

五感だけではなく、運動感覚も取り入れた感覚全ての総まとめです。

もちろん、従来の訓練もそれなりに必要ですがこのスヌーゼレンはそれらを補充し個々の感覚を充電する場所と言えばおわかり頂けると思います。

スウェーデンでは90年の前半にストックホルム、リーンショーピング、ゲーテボルグ、ルンドと次から次へと大きなスヌーゼレンセンターが出来ました。

私は作業療法士として乳幼児・児童・青年を対象にしたハビリテーションセンターに勤めていますが、スヌーゼレンに早くから興味を持っていた私は運良くこのプロジェクトを推進する担当者になりました。嬉しかったのと同時に大きな責任も一手に引きうけたわけです。

現在ハビリテーションには地下二部屋がスヌーゼレンとして環境設定されています。そして様々な形で毎日この部屋は利用されているのです。
患者は軽度から重度の身体障害者、知的障害者、自閉症者、拒食症など精神科の患者などいろいろです。例えば、一人の知的障害者は自分の指を目の中に押し込むような異常行為をする悪癖があるとします。いくらきつくしかってもなだめてもその行為を止めません。この人は何か指に代わる刺激を目に欲しているわけです。スヌーゼレンには視覚を刺激する機器がたくさん置いてあります。100本ものガラスフィーバーオプティックスと呼ばれる細いナイロンの糸が壁からぶら下がっていたり、無造作にマットの上に投げ出されていたりしていてその中を色も鮮やかな光が通過するのです。それをこの人は手にとり目にかざせば光の流れを視覚に感じるわけです。これが指の代償になり目を痛めなくて済みます。

また頭をごつごつ自らの手で叩く行為のある人はホワイトルームでリラックスしながら環境音楽のバイブレーションを身体や頭に感じる事でこの行為の代償になるものをみつけます。

拒食症の少女は毎日リラックスするためにここへ来ます。そうすれば食べた物を吐き出さなくて済むからです。また拒食症の人は周囲からの過大な強制もあるのですが、自らもパーフェクトにそれに答えようとする性格の人が多いそうです。

このスヌーゼレンでは一切外部からの要求を受け付けないのが特徴です。この部屋にいるときは自分自身が主役であり自分のための時間と空間を得るのが目的なのでこの少女にとっては過ごし易い空間なのでしょう。

片側麻痺などの軽度の児童は遊戯の部屋で遊びながらマットレスの階段を上り下りしてバランスや運動感覚を養います。柔らかい滑り台をごろごろと転びながら降りて方向感覚を知覚したり、小さいボールがいっぱい入っているボールプールの中で戯れ、基本的感覚を遊びの中で習得していきます。

ハビリテーションセンターのスヌーゼレンも昨今話題になり、どのように利用しているのか知りたいとスウェーデン国内、国外からも見学や視察に来る人々が増えました。２年前には健常児の通う小学校にも出向いて職員にスヌーゼレンの説明をしました。そしてこのスヌーゼレンが初めて小学校にも導入されたのです。身体全体がリラックスするので、体内の自覚器官がたやすく統合でき物事への集中力も高まって来ると評判もよく、いろいろな効果が得られるととても好評なのですが、スヌーゼレンをつくるのがあまりにも簡単なのでそれを利用する目的を見失いやすくなるので注意が必要です。

目的は利用する場所や利用者の対象によっても著しく違うと思いますが、スヌーゼレンのコンセプトをわきまえていれば誰にとっても素晴らしい効果が得られると思います。

スヌーゼレンは感覚が主体なので、文字の上からは会得できないものがあります。もしスウェーデンへ行く機会があればぜひスヌーゼレンセンターを訪問して体験してみてください。

小規模のスヌーゼレンは高齢者のデイケアセンターやグループホームなどにも、まるで竹の子がはえるように次から次へと設立されています。小学校などの普通児の学校へもどんどんひろがっているのですが、この試みはスウェーデンが始めてではないでしょうか。

世界ではスウェーデンはもとより、北欧五カ国、ドイツ、アメリカ、カナダにも静かなブームとしてひろがっています。昨年にはポーランドに出張する機会を得てスヌーゼレンについて説明しました。

日本では98年の九月に東京・大阪でスヌーゼレンの初セミナーがジョー・キューイン氏を迎えて開かれました。私もその時同行してスウェーデンのスヌーゼレンを紹介することができました。

日本にもすでにスヌーゼレンは上陸しているのです。

障害者、高齢者のための福祉が渇望されている日本でスヌーゼレンがどのように活用されるかまだ白紙の状態なので非常に興味深いものです。

1997年には初の世界スヌーゼレン学会がイギリスで開かれ、98年にはドイツで第２回目、さらに99年には第３回目がカナダで開かれます。
世界的なブームもブームだけでは終わらない確固としたものになるよう願っている私ですがすでに、揺るぎ無いスヌーゼレンを感じて喜んでいます。

北欧の森を走る

～スウェーデンのオリエンテーリング～

塩沢　美緒
Ms. Mio Shiozawa

１時間程走っただろうか。ようやくレース中盤のコントロールに向かう。苔の生えた岩山を下り、遠くに見える針葉樹の林を目指す。スウェーデンの苔は乾燥していて、走るとサクサク音がする。

この音を感じながら走るのが私は大好きだ。湿地に入った時の、ふかっとして冷やりとする感触も全てスウェーデンの森を実感できる。後ろからのランナーがさっと走り抜け、林の中に消えていく。久しぶりに90分のレースになりそうだ。

オリエンテーリング・・・日本ではあまりなじみのないこのスポーツは、北欧、特にスウェーデンではスポーツニュースになる程のメジャースポーツである。国内には800ものクラブがあり、競技人口は７万５千人にものぼる。ルールはいたって単純である。スタート、ゴール、いくつかの通過しなければならないコントローラーと呼ばれる地点が森の中に設置される。ランナーは地図とコンパスを使い、それらコントローラーを通過し、ゴールまで速く走った者が勝ちである。

オリエンテーリングと聞いて、おそらく多くの日本人が持つであろう、歩く宝探しというようなイメージは、ここではちょっと違っている。

スウェーデンでは springer　orienteringと言う。まさに走るのである。この国の人たちは、オリエンテーリングを競技スポーツとして認識している。学生時代にこの競技の魅力に取りつかれて以来、この数年スウェーデンの森を走ることは、私にとって究極の娯楽であり、挑戦になっている。

98年の夏はウプサラ滞在中にEskil-stunaという町の３日間の大会に参加した。スウェーデンでは１年間に700程の大会が開かれるが、国際大会から地域の大会まで規模は様々だ。参加者は２千人程だったろうか。この大会は宿舎も小さく、外国人は私一人であった。

１日目、６㎞程のコース。距離はそう長くはないが、女子のエリートクラス（最上級）にエントリーしたので、難易度は高い。スピードは速くなくとも、ミスは少なくしたい。レース中のミスはロスタイムだけではなく、精神的なダメージとなるからだ。そう心に決めてスタートする。

スタートして15分、第２コントローラーに辿り着けない。最初のコントローラーから多少距離があり、ぼんやり走ってしまったのだ。なんとなくこの辺りと、漠然としか自分のいる位置が把握できず、立ち止まってしまった。後ろから超特急のスウェーデン人ランナーたちに追い越されていく。コントローラーよりも15ｍ程東にずれた所にいたようだ。

オリエンテーリングでは体力もさる事ながら、地図をよみ、良いルートを決定し、いかにスピードを落とさず、チェックポイントを通過してこられるかが重要だ。駿走でも現在地ロストしていたのでは意味がない。自然の森の中で、この自己決定能力が要求される点が、このスポーツの特殊な点であり、私は最大の魅力だと　思っている。

後半は前半のミスが効いて、集中して臨んだ。終盤で15分後ろのランナーに追いつかれてしまった。結果を見ると彼女は上位になっており、私とトップとの差は20分にもなっていた。２日目からは10㎞のレースになり、私はますますスウェーデンの森と格闘することとなった。

ルネイはスイスのオリエンテーリングランナー。どこの国にも同じ様な考えの人間がいるものだ。彼もまた、オリエンテーリング好きが高じてスウェーデンにやって来たという。

この日はUppsala Allianssというクラブのトレーニングに参加する。学校が終わると郊外20㎞程の森に自転車ででかける。車がない我々は、学校から借りたアーミーバイクが専ら移動手段となる。ガムラウウプサラを眺めながらどんどん郊外へ。ドームシルカンは、はるか、小指の爪ほどになってしまった。

夕方６時、森に人が集まってきた。地域のクラブの活動は、夏は夕方に始まり仕事や学校を終えたクラブ員が走りにやってくる。なんともゆとりのあるアフター５ではないか。

オリエンテーリングは競技スポーツであると同時に、familieiderottとも言われる。クラブ員も小さな子供からおじいさんまで同じユニホームを着ている。なんとも可愛らしい光景だ。大きな大会では10歳から75歳位までの年齢によるクラス分けがなされ、多くの人が家族とともにやってくる。

この日のコースは3種類。子供用、短距離、長距離と分けてあった。ルネイはロングコース、私はショートコースを走ることにした。私の方が遅いので、同じ頃に帰ってくる計算だ。
子供用のコースでは、親が一緒について教える。こんなころからこの森で鍛えられ、どんなランナーになるのだろうか。

この日ウプサラは雨降りだったが、いよいよ走っている最中にも雨が降ってきた。私は早々にきりあげて、ゴールに戻ってしまった。帰りは、ウプサラへ行くという兄妹の車に自転車ごと乗せてもらうことができた。

「なぜオリエンテーリングをしにスウェーデンまでやってくるの？」と尋ねられルネイと顔を見合わせてしまった。実はスウェーデンも　外国人にとって、北欧のオリエンテーリングは一目置かれている、という認識は薄い。競技人口が多く、大会の規模が大きく質が高いという理由もあるが、その魅力はこの国の森特有の地形にある。日本の森には起伏のはっきりした山や谷が多いが、スウェーデンの森はなだらかで、大小の岩盤が幾つも連なる。フィヨルドのように氷河によって作られ流され、できた地形だからだ。この差が地図よみを複雑にし、オリエンテーリングを楽しくする。スイスにもこのような地形はないという。私たちはこの森を走りたくてやって来たのだ。

どうしてスウェーデンのオリエンテーリングにこだわるか…この夏幾度も尋ねられ、考えた事だ。実はそれは私にとって単に競技性の問題だけにとどまらない。家族や、仲間とそういうふうに森にかかわっているこの国の人のスタイル自体が好きなのだ。

森でハーロンを摘むことでも、カンタレルをさがしに行くことでも良かったのかもしれない。たまたま私にとってオリエンテーリングが一番近くにあるものだったのだ。

スウェーデンに暮らしてみなければ、おそらくこういうふうには考えなかっただろう。

私のオリエンテーリングの追究は、しかし、まだまだ続くだろう。

私の心は当分スウェーデンの森から帰ってこれそうにない。

森泰人スカンジナビア・コネクション・ライブレポート

LIVE REPORT：Yasuhito Mori & his Scandinavia Connection

音楽評論家　後藤　　誠
Mr. Makoto Goto

アメリカ南部の港町ニューオリンズに生まれたジャズだが、今やクラシックに匹敵する芸術性と国際性をもった共通の音楽言語となった感がある。残念ながらジャズの中心地がアメリカという認識は今も昔もそれほど変わってはいない。だがヨーロッパ、とりわけスウェーデン、デンマーク、ノルウエーといった北欧諸国のジャズも、徐々にではあるけれど、日本においてその裾野を広げつつある。

1981年スウェーデンに移住、現在ははイェテボリに住む森泰人（1952年東京生まれ）は、ボブ・ハーグ、リー・コニッツ、スタン・ゲッツ、トゥーツ・シールマンスといった一流ジャズ・ミュージシャンとの共演で知られる日本人ジャズ・ベーシストだ。

森は1994年以降、「スカンジナビア・プロジェ

クト」という名称で独自のプロジェクトを進めてきた。これは、ほぼ1年に1回のペースで、北欧・スウェーデンの第一線で活躍する売れっ子の若手ミュージシャンらを組織し、彼等の素晴しさを日本のジャズ・ファンに紹介しようという試みである。

森泰人については、昨年12月25日の朝日新聞朝刊の「ひと」欄で紹介されている。また、今年1月にはテレビ東京系ネット番組「大使の国のたからもの」で3週間にわたってスウェーデン特集が組まれたこともあって、ご存じの方も多いと思われる。

さて、今回の森泰人スカンジナビア・コネクションは、昨年11月下旬から12月上旬にかけて東京、北海道、秋田の各地方都市を回った。東京は、11月26日（初日）がスウェーデン大使館、12月5日（最終日）が南青山『ボディ＆ソウル』で行われた。

今回森が用意したのは、2サックス、ギター、ベース、ドラムスというクインテット。メンバーは、以下の通りである。エバン・スベンソン（ギター）、ウルフ・アンダソン（アルト・サックス、フルート）、オーベ・ヘイマン（テナー・サックス）、森泰人（ベース）、マグヌス・グラーン（ドラムス）　ギターのスベンソンは、1950年イェテボリ生まれ。長年にわたってスウェーデンを代表するジャズ・ギターリストとして活躍してきた実力者である。メインストリーム系ジャズの伝統を汲みながらも、随所にコンテンポラリーな要素を取り入れている。森との共演は、1993年秋からずっと継続している。

サックス奏者のウルフ・アンダソンは、1940年オーンシェールズビーク生まれ。1960年からプロ・ミュージシャンとして活躍しているスウェーデン第一のサックス奏者のひとりである。トロンボーン奏者エイエ・テリーンのクインテットでプロデビューを飾ったアンダソンは、1970年代にスウェーデンのフュージョングループの草分け的存在「エグバ」のリーダーとして活躍。その他、スタジオへの仕事も数多くこなし、かつて一世を風靡した人気バンド「アバ」や国民的大歌手モニカ・セッテルンドの音楽監督をつとめるなど、実に華々しいキャリアを誇る。1980年から15年間にわたって王立ストックホルム音楽大学サックス科の主任教授として教鞭もとった。長いキャリアを誇るだけあって、演奏テクニックはもちろん、まさに非の打ちどころ　がない。圧倒的な存在感を誇る名手である。

もう一人のサックス奏者、オーベ・インゲマンソンは、1958年ハルムスタッド生まれ。先に述べたアンダソンに比べるとまだまだ若手だが、ボブ・バーグやボブ・ミンツァーといったアメリカ人ミュージシャンが彼の才能を絶賛している。現在のプレイには、どことなく若き日のジョン・コルトレーンを彷彿とさせるものがある。

ドラマーのマグヌス・グラーンは、1964年シュレフテオ生まれ。1986年にスキュールップ音大を卒業後、人気ジャズ・グループの「アンコール」に参加した。以後多くのグループで引っぱりダコの売れっ子ドラマーに成長。1997年11月にはアンダシュ・パーション（ピアノ）と森泰人（ベース）とのトリオで来日している。

今回のクィンテットは、ギター、ベース、ドラムスのトリオを核として、曲によって一人もしくは二人のサックス奏者をフューチャーした「ムーン・アンド・サン」（アレック・ワイルダー作）、ジャズファンの間では「ディア・オールド・ストックホルム」の曲名で知られているスウェーデン民謡なども取り上げた。楽想、スタイル、レパートリー、どれをとってもアメリカ産ジャズの物真似ではないオリジナリティ。そして、北欧特有といってもいい、聴く者の心のひだに染み入るような繊細さ。初心者からマニアまで、すべての人にわかりやすい形で、スウェーデン・ジャズの水準の高さ、素晴しさを伝えることに成功した。

森泰人が長年にわたって、北欧を代表するベーシストとして活躍してきたことを同じ日本人として筆者は大きな誇りを感じる。また、日本とスウェーデンの間に掛け橋を作りたい、ジャズによる音楽言語を通じて文化交流・人的交流を図りたいという森のアイディアにも、筆者は大いなる共感を覚える。音楽産業が巨大化し、消耗品化した現在、森泰人の主宰する「スカンジナビア・コネクション」は、ジャズという音楽を愛する者にとって、この上なく意義深いプロジェクトといえる。次回の来日は、1999年5月頃、ラーシュ・ヤンソン（ピアノ）のトリオを予定しているという。ぜひともお見逃しなく。

書籍紹介 *Books*

『北欧の政治　―デンマーク・フィンランド・アイスランド・ノルウェー・スウェーデン―』

オロフ・ペタション　著
岡沢憲芙監訳
斎藤弥生・木下淑恵訳
早稲田大学出版部
定価　2800円＋税

北欧諸国は、福祉と環境、地方自治などさまざまな分野で注目を集めているが、先進的な政策は「北欧モデル」と呼ばれる政治システムから生まれてきた。したがって、どの分野の調査研究にも政治を知ることは不可欠だと思われる。しかし、これまで北欧の政治に関する日本語情報には国により大きなばらつきがあった。本書は、北欧各国の政治を分析した手ごろな入門書であり、情報量の拡大に一役かっている。

オロフ・ペタションは、現代スウェーデン政治学を代表する研究者だが、その“Nordiskapolitik”はすでに３カ国語に翻訳され、本国でも版を重ねている。本書は、第３版（1995年）の全訳である。各章では、歴史、北欧モデル、選挙と政党、会議、行政権、行政と司法、組織団体、世論形成、市民と権力、権力構造、北欧と世界が扱われる。扱う範囲は、北欧５ヵ国と３つの地域（グリーンランド、フェロー諸島、オーランド）である。

北欧諸国は、しばしばひとまとめにして理解されるが、本書の分析からは各国の共通点と相違が浮かび上がってくる。北欧におけるスウェーデンのユニークネスも理解できよう。

本書には本文以外にも魅力がある。１つは、豊富な関連データである。北欧諸国のさまざまな選挙結果や政府の政党別構成などが巻末にまとめられている。たとえば、選挙は1970年から、政府の構成は戦後、国民投票は今世紀以降、最新のデータまで掲載されており、統計集として利用することもできよう。もう１つは、同じく巻末にまとめられた参考文献である。なかでも「北欧の政治を学ぶために」では、さらに知識を深めるのに役立つさまざまな案内書や定期刊行物が提示されている。

北欧各国の政治を知りたいときはもちろん、スウェーデンを北欧の視点から見ようとする場合にも、役に立つ手引書になろう。　（木下　淑恵）

『スウェーデンの教育　1997』

Marit　Jorsater 著
遠山真学塾
定価　800円＋税

スウェーデンの教育をグラフなどのデータを中心に紹介している“Education In Sweden1997”という小冊子の翻訳である本書は、受験戦争・点数序列主義にしばられて窒息してしまいそうな日本とは、まるで正反対の教育環境を子どもたち、また国民全体に保障していることを、数値をもってみごとに伝えてくれるブックレットである。

就学前教育から大学教育、生涯教育までがわずか88ページにまとめられ、１ページごとにグラフ・表が記載され、簡単なコメントがポイントを絞りながらそえられている。スウェーデン統計局が刊行したものであるが、行政機関の本にとしてはとても読みやすい。

日本では教育白書なるものが「我が国の文教施策」と題して毎年文部省から刊行されているが、本自体が厚く、内容もデータも大変多く、専門的で多岐にわたっているため、国民として一冊持っておこうと思う人はごく少数であろう。その点このブックレットのコンパクトさは、国民に受け入れやすいものであり、教育行政にスウェーデン人が、一市民として参与していきやすい状況を象徴しているようだ。ここでもスウェーデンの「民主主義」の姿に気がつかされる。

不況のなかではあるが、スウェーデンは国民総生産の7.5％（95年）を公教育費にあてており（95年日本の公教育費はＧＮＰの4.81％）、教育に投資する学習国家といえる。

「教師の労働環境の改善は、まずカーテンから」と基礎学校の校長が言っていたのに驚いたことがある。96年度の教員一人当たりの生徒数は、基礎学校（小中学校）で13名であり、日本は同年、小学校19名、中学校で17名である。20名前後の小人数のクラス環境を実現しており、教員の人権にも配慮したコスト配分がなされているのではないだろうか。多様なニーズを満たし、多様な在り方を認めているスウェーデン人の幅広さを感じさせてくれる１冊だ。

（大瀧　恵里也）

（この冊子についてのお問い合わせは、遠山真学塾まで：☎0422－54－4709まで）

～Information～

☆環境問題研究会

日　時：5月12日（水）18：30～20：30
講　師：小沢徳太郎（おざわ　とくたろう）氏（環境問題スペシャリスト）
テーマ：「21世紀社会のモデル探し
　　ースウェーデンは21世紀社会のモデルたり得るだろうかー」

これまで「スウェーデンから何を学ぶのか」という問いかけが多かったが、今回はモデルたりえるだろうかと言う支点から、日本の現状と比較しつつスウェーデンの環境問題についてお話し頂きます。

定　員：60名
参加費：会員無料／一般　1,000円
会　場：トーモク会議室（丸ノ内三井ビル4階）
　　東京駅南口から徒歩3分、または千代田線二重橋前4番出口より徒歩1分

お申込・お問い合わせはファックスまたはEメールにて

㈶スウェーデン交流センターまでお願いします。
FAX：０３－３２１３－２８２５
E-mail : scf108@pb3. so-net. ne. jp
申込受付時間　AM10：30－PM５：30

1998年　研究所活動一覧

1・19（月）から　冬季スウェーデン語講習会
1・23（金）　「独学のスウェーデン語」講師佐藤一郎氏
2・7（土）　「スウェーデン語夏期語学留学ガイダンス」講師佐藤園子氏
2・20（金）　「外国語修得・何故日本語か」講師ラーシュ・バリエー
3・5（金）　「スウェーデンと日本の地方自治」講師小笠　毅氏
4・22から　春季スウェーデン語講習会
5・15（金）　「スウェーデンのエネルギー政策を中心に」講師飯田哲也氏
6・26（金）　「スウェーデン文学について」講師山下泰文氏
7・14（火）　「スウェーデン語修得の為の学習方法」講師佐藤一郎氏
8・21（金）　「在庫書籍処分サマーフェアー」
9・16（水）－9・30（水）　「ダーラナ写真展」松元さぎり、中嶋千絵企画・共催
9・17（木）　「自助努力と生き残り」講師訓覇法子氏
9・24（木）－9・26（土）「ＣＤ・在庫処分フェアー」
9・9（水）から　秋期スウェーデン語講習会
11・20（金）　「北欧の幼児教育」講師荒井　洌氏

シリーズ　エレン・ケイ（4）

エレン・ケイ『児童の世紀』から100年

The 100 Years from "The Century of Child"（by Ellen Key）

白鷗大学教授　荒井　　洌
Prof. Kiyoshi Arai

エレン・ケイが『児童の世紀』を世に問うたのは、1900年のことである。いま、彼女の労作を読み込んでいくと、その熱意やアイロニーのすごさには、驚嘆してしまう。とにかく、すごい人だ。今回は、連載の４回目である。

その１　1900年・センセイショナルな発言
その２　子どもの成長と家庭の持つ意味
その３　エレン・ケイを受け止めた日本の女性
その４　カール･ラルソンの画集を開きながら

目を通して下さっている諸兄姉に感謝します。

その４　カール・ラルソンの画集を開きながら

○100年前のスウェーデンの田園

いま、自分の机の上には、カール・ラルソンの画集が載っている。ストックホルムで求めたもので、"OUR　FARM"というタイトルが付けられている。心のなごむ美しい田園風景と、その風景に抱かれて働く人びとの姿が描かれている。見覚えのある方も多いことだろう。

表紙の絵は、広い庭とリンゴの木、リンゴを拾う女の子や女性たち。ページを繰っていくと、働く男や女、人間と一体となって働く家畜たち、それに、お手伝いをする子どもたちが登場する。この人たちは、みな、カールラルソンの周囲にいた人びとなのである。

ああ、なんと平和な光景！土の臭い、材木を切ったときの香り、土のついたジャガイモの手触り、馬のいななき、ニワトリの泣き声……。

カール・ラルソン画集"OUR　FARM"の表紙(English　version by Olive Jones, Methuen Children's Books ・ London, 1989)

カール・ラルソン（Carl　Larsson）は、1853年にストックホルムに生まれ、1919年に66歳で一生を終えている。エレン・ケイはと言えば、1849年に生まれ、1926年に亡くなっている。つまり、２人は同じ時代の空気の中にくらし、そして、共に田園の牧歌的な美しさと、その中で働く人びとの労働行為を愛していたのだ。

○エレン・ケイの心象風景

彼女は、理想の学校というものを次のように思い描いた。

「未来の学校はどれも大きな庭園に囲まれ、自然学習はそこで最初の教材を手に入れることができ、美的感覚はそこでその直接の栄養を摂取する。」

「自然の体操は方式化した体操よりも、はるかに教育的に大きな意味をもっている。」

「各種の手工や園芸作業を通じて、数学や自然科学の範囲である多くの発見を、子どもに自力でやらせることができる。」

そして、未来の生活の喜びを次のように描き出している。

「手仕事が人間の幸福の一部となるであろう。そこで、人びとは第二のルネサンスを経験するで

あろう。これは古代の人間が、芸術味に満ちた家具や、色彩ゆたかな織物や、美しい彫刻を、かれらの手から創造したときに経験した人格的喜びの再現である。」

私は、いま、カール・ラルソンの絵とエレン・ケイの文章を互いに見くらべながら、往時のスウェーデンを思い、ロマンティックな、牧歌的な気分に浸っている。

スウェーデン保育研究会 1999年夏 北欧へ メルヘンと保育の旅

〔主　　催〕 スウェーデン保育研究会
〔協　　賛〕 スウェーデン社会研究所
〔リーダー〕 荒井　洌（白鴎大学）
〔期　　間〕 8月24日（火）～9月5日（日）
〔メンバー〕 20名

エレン・ケイのゆかりの地とアンデルセンのふるさとを訪ね、フィロソフィーとメルヘンに浸りながら、こころ静かに北欧の保育園や風物に親しみます。参加者は、あらかじめ『児童の世紀』を精読することとします。

8月24日	火				全員が成田に前泊し、夕食会 〔成田泊〕
25日	水	東京（成田）　発 コペンハーゲン　着 コペンハーゲン　発 ストックホルム　着	11：50 16：20 17：25 18：35	SK－984 SK－420 専用バス	成田よりコペンハーゲン乗り継ぎにてストックホルムへ 〔ストックホルム泊〕
26日	木	ストックホルム		専用バス	午前：保育園訪問（郊外） 〔ストックホルム泊〕
27日	金	ストックホルム		専用バス	午前：保育園訪問（郊外） 〔ストックホルム泊〕
28日	土	ストックホルム		専用バス 船	ストックホルム群島への船旅 〔ストックホルム泊〕
29日	日	ストックホルム ⇩ ワードステンナ ⇩ リンシェーピン		専用バス	エレン・ケイゆかりの地を訪ねて ゼミナール① 〔リンシェーピン泊〕
30日	月	リンシェーピン　発 ルンド　着	10：03 12：45	X－2000 専用バス	スロイド・インスティチュート訪問 新幹線でルンドへ 〔ルンド泊〕
31日	火	ルンド		専用バス	保育園訪問（郊外） ゼミナール② 〔ルンド泊〕
9月1日	水	ルンド ⇩ マルメ　発 コペンハーゲン　着	 13：30 14：00	専用バス 水中翼船 (SK6835) 専用バス	マルメから船でコペンハーゲンへ 〔コペンハーゲン〕
2日	木	コペンハーゲン ⇩ オーデンセ ⇩ コペンハーゲン		専用バス	アンデルセンのふるさとを訪ねて ゼミナール③ ディナーパーティー 〔コペンハーゲン泊〕
3日	金	コペンハーゲン		専用バス	保育園訪問（郊外） ゼミナール④ 〔コペンハーゲン泊〕
4日	土	コペンハーゲン　発	15：40	SK－983	帰国の用意 〔機内泊〕
5日	日	東京（成田）　着	09：30		

第三種郵便物認可
昭和44年12月23日
スウェーデン社会研究月報　平成11年4月25日発行　第2・3合併号　通算309号　毎月1回25日発行　編集責任者　岡沢憲芙　発行所　社団法人スウェーデン社会研究所　定価四〇〇円